

雑司ヶ谷研究 17

— 子どもの遊びと遊び場選択に関する研究 —

Zoshigaya Study 17
– Children’s Play and Choice of Play Spot –

鈴木 舞衣* 薬袋 奈美子**
Mai SUZUKI Namiko MINAI

要 約 雑司ヶ谷は戦災・震災の被害を免れた背景から現在も木造住宅が複数残されており、木造密集市街地に指定されている。一方で、北西には都内有数のターミナル駅である池袋駅があり、周辺は大規模商業施設や高層ビル、タワーマンションなどが存在する都市的空間である。本研究では、居住地の違いによって外遊びの様子に違いがあるのかを明らかにすることを目的に分析を行った。都市的地域に住む子どもたちに比べて、住宅地に住む子どもの方が活発な遊び方を好んでいる一方で、外遊びの頻度が低いことがわかった。また、COVID-19 流行下において、都市的地域に住む子どもは遊び場を変化させることで外遊びを継続したのに対し、住宅地に住む子どもたちは活動型の遊び方から滞留型の遊び方に変化させることによって外遊びを継続した事が明らかとなった。外遊び頻度の低下が問題視される今、公園だけでなくより幅広い場所で自由に遊べる環境を整備することが重要であると考えられる。

キーワード：雑司ヶ谷，外遊び，遊び場，COVID-19

Abstract Zoshigaya is designated as a densely wooded urban area, with several wooden houses still remaining. In contrast, there is a railroad terminal to the northwest, and the surrounding area is an urban space with commercial facilities and high-rise buildings. The purpose of the analysis in this study was to clarify whether there are differences in outdoor play due to differences in residential location. Results revealed that children living in residential areas to prefer a more active play style but play less frequently than children living in urban areas. Results also revealed that during the COVID-19 epidemic, children living in urban areas continued to play by changing their playgrounds, while children living in residential areas continued to play by changing their play styles. These days, the decline in the frequency of play is considered a problem, so an environment needs to be created in which children can play freely.

Key words : Zoshigaya, Playing outdoors, Play spots, COVID-19

1. 研究の背景と目的

子どもにとって遊びは精神的・肉体的成長を促す

重要な生活行為の一つである。なかでも運動遊びは体力や運動能力に加え、コミュニケーション能力や人間関係構築能力を育むことが可能である。また、ユニセフ¹⁾は外で遊ぶ頻度の多さと、地域に遊び場があることが幸福度を高めると報告している。しかし、現代の子どもは外遊びをしない傾向にある。その要因の一つとして、空き地の減少やボール遊び禁止の公園の増加、交通量の増加に伴う道遊びの困難

* 家政学研究科住居学専攻
Graduate School of Home Economics,
Division of Housing and Architecture
** 住居学科
Department of Housing and Architecture

化など、自由に遊べる場所が減少していることが考えられる。

秋田ら²⁾の報告によると、子どもが遊び場として挙げる場所の約85%が公園、校庭またはその両方であり、子どもが選択肢として挙げる屋外空間の遊び場は限定的で遊び空間が保障されていないと指摘した。さらに、大都市・中都市において屋外の遊び空間を公園のみとする回答が多かったことが報告されている。このことから、遊び場に限られるという傾向は都市部においてより顕著であると考えられる。

本研究では、都市的空間と木造密集市街地の混在する雑司ヶ谷地域を対象に、都市的地域に住む子どもたちはどのように外で遊んでいるのか、どのような空間を遊び場として選択しているのかを明らかにすることを目的として調査を行う。調査方法として、雑司ヶ谷地域内に所在する豊島区立南池袋小学校の児童4年生から6年生を対象に、好きな遊びや遊び場、遊びの頻度などについてアンケート調査を行い、利用する通用門によって、居住地を「都市的地域」と「住宅街」の2つに大別する。

2. 雑司ヶ谷地域について

雑司ヶ谷地域は、鬼子母神を中心とする寺社地として発展し、江戸時代には都内有数の遊興地であった。近代に入ると、関東大震災や東京大空襲といった大規模な災害・戦災の被害に見舞われるが、雑司ヶ谷地域は大きな被害を免れた。そのため、住宅を失った人々の受け入れ先として発展したという経緯がある。現在も木造の住宅が複数残されており、地域の一部が木造密集市街地・不燃化特区として指定されている。北西には池袋駅があり、その周辺は大規模商業施設や高層ビル、タワーマンションが複数所在している。そのため、雑司ヶ谷地域は木造密集市街地と都市的地域の混在する特色ある地域である。

南池袋小学校は、Fig.1に示すとおり雑司ヶ谷地域の中心部に位置する。南部は木造密集市街地を中心とする閑静な住宅街であるのに対し、北部は繁華街に近く開発が進んでいるエリアである。北側に位置する正門と、南門の2つの通用門が存在し、利用する門によっておおよその居住エリアが分けられる。なお、図中の通学範囲は、通学路をもとに想定した回答者の居住範囲である。国土地理院の基盤地図情報によると、学区北側(Fig.2)には1552棟、学区南

側(Fig.3)には2761棟の建物が存在する。そのうち、鉄筋コンクリート造かつ3階建て以上の堅ろう建物は学区北側で39.9% (620棟)、学区南側で22.4% (619棟)である。このことから、北側はマンションなどの集合住宅が中心、南側は戸建住宅が中心であるものと考えられる。同じ学区内でも居住地によって周辺の様子は異なり、子どもの遊び方にも違いがあるものと推察される。また、住宅街側に所在する雑司ヶ谷公園は2020年の拡張整備によって、面積が大幅に拡大した。さらに、ボールひろばが新設され、子どもの遊び方にも変化があったものと考えられる。

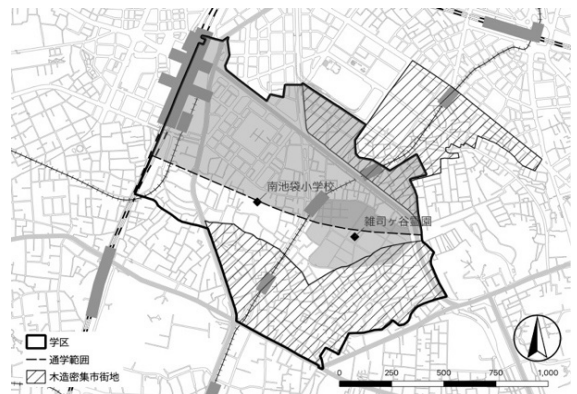


Fig. 1 Minami Ikebukuro Elementary School District and the densely wooded urban area



Fig. 2 North side of the school district



Fig. 3 South side of the school district

3. 調査結果

3-1. 調査の概要

調査対象は南池袋小学校に通学する4年生から6年生の児童206名で、正門利用者94名、南門利用者から112名の回答があった。実施時期は2021年12月頃で、Microsoft Formsを利用してWEB上で配布・回収を行った。設問の内容はよくする遊び方、最も利用する遊び場、遊びの頻度などについてで、2021年頃に加えて、2020年頃（COVID-19最流行期を想定）、2019年以前の3つの時期に分けて調査を行った。

3-2. 子どもの好む遊び方について

子どもの好む遊び方について調査した結果がTable.1である。この設問は選択肢の中から当てはまるものを3つまで答えるという複数回答形式であり、正門を利用する児童から235、南門を利用する児童から281、計516の回答が得られた。小学校全体の結果を見ると、「おにごっこ」が最も多く、ついで「話しながら歩く」、「乗り物遊び」という結果になった。

門ごとに結果を比較すると、都市的地域側に住む正門利用者では「おにごっこ」と「話しながら歩く」がほぼ同数である。一方で住宅街側に住む南門利用者は「おにごっこ」が「話しながら歩く」の1.5倍を超えている。同じく「ボール遊び」、「なわとび」、「キャッチボール」についても、南門利用者の回答数が多い傾向にあることがわかる。

ここで、遊び方の傾向を比較するために遊び方の一般的な参加人数と必要面積に基づく整理をFig.4に示し、それらをFig.5に示す「滞留型」、「移動型」、「活動型」という3つに分類を行った。この分類をもとに集計した結果がTable.2である。「移動型」は正門・南門の回答数がほぼ同程度である。対して、「滞留型」は約1.9倍、「活動型」は約1.4倍、南門利用者の回答が多いことがわかる。

言い換えると、木造密集市街地を含む住宅街では、都市的地域と比較して「滞留型」、「活動型」の発生量が多いものと考えられる。その理由として、小学校より南側の範囲に公園や児童遊園が多く存在しているためであること、豊島区では指定された公園以外でのボールの使用が禁止されており、学区南側の雑司ヶ谷公園でしかボール遊びができる場所がない

こと、南側の木造密集市街地エリアには細い路地が残されており、車の通行量も比較的少ないために、家の前の道などが「滞留型」を中心とした遊び場として利用されていることが考えられる。「移動型」の遊びは遊びや習い事、塾などの行き帰りにも発生しやすいために、正門・南門どちらも最も回答数が多かったものと考えられる。

Table 1 Aggregate results of types of play

	正門(n=235)	南門(n=281)	計(n=516)
なわとび	3.83%	6.76%	5.43%
キャッチボール	2.13%	5.34%	3.88%
バドミントン	2.98%	2.49%	2.71%
チョークで落書き	1.28%	1.42%	1.36%
話しながら歩く	21.70%	15.30%	18.22%
乗り物遊び	12.34%	12.46%	12.40%
走り回る	12.77%	12.10%	12.40%
ボール遊び	5.53%	9.96%	7.95%
おにごっこ	22.13%	24.20%	23.26%
かくれんぼ	4.26%	2.14%	3.10%
遊ばない	1.28%	2.49%	1.94%
その他	9.79%	5.34%	7.36%

上位3つまでを選ぶ複数選択
着色部は他方と比較して優位な項目を示す。

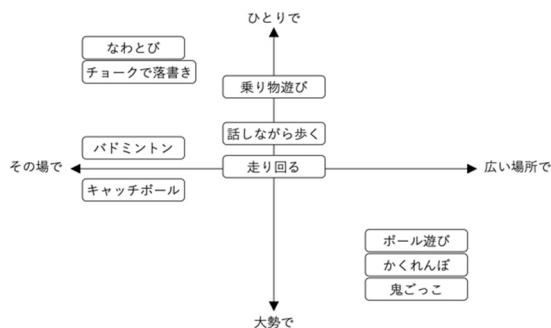


Fig. 4 Classification of types of play (1)

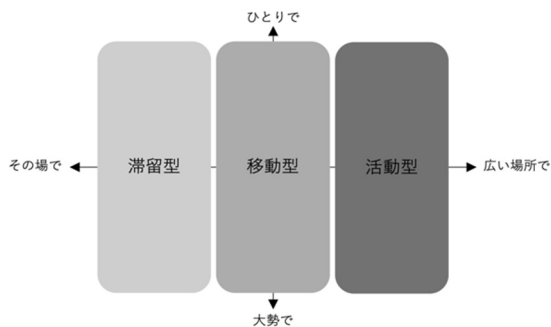


Fig. 5 Classification of types of play (2)

Table 2 Aggregate results by category of types of play

	正門(n=209)	南門(n=259)	計(n=468)
滞留型	11.48%	17.37%	14.74%
移動型	52.63%	43.24%	47.44%
活動型	35.89%	39.38%	37.82%

着色部は他方と比較して優位な項目を示す。

3-3. 子どもの好む遊び場について

子どもの最も遊ぶ場所について調査した結果が Table 3 である。この設問は、選択肢の中から最も遊ぶ場所を選択するものであり、正門利用者から 88、南門利用者から 109、計 197 の回答が得られた。この図から、児童の多くが「公園」で遊んでいることがわかる。それぞれの門を比較すると、外遊びに消極的な回答は南門利用者のほうが多い。また、正門・南門ともに 2 割近い児童が「道路」と回答している。このことから、都心部では公園で遊ぶ児童が多いものの、一部の児童は道路を遊び場として利用している事がわかる。

また、選択した遊び場とその選択理由をクロス集計した結果が Fig.6 である。子どもが遊び場を選択する理由として最も多いのが、「広いから」である。一方で、「道路」を選択する理由は「家から近いから」、「自由に遊べるから」の割合が高い。家から近く、気軽に遊べる場所として道路が利用されていることが明らかとなった。

Table 3 Aggregate results of play spots

	正門(n=88)	南門(n=109)	計(n=197)
公園	52.27%	45.87%	48.73%
道	19.32%	18.35%	18.78%
校庭	0%	1.83%	1.02%
家の中	13.64%	12.84%	13.20%
遊ばない	7.95%	11.01%	9.64%
その他	6.82%	10.09%	8.63%

着色部は他方と比較して優位な項目を示す。

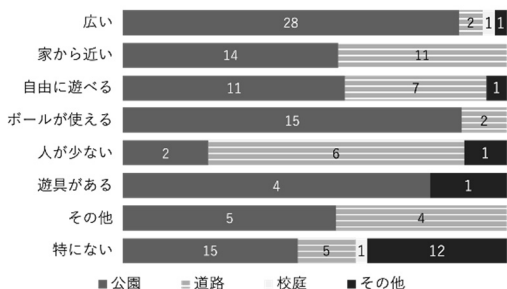


Fig. 6 Reasons for choosing a play spot

3-4. 遊び方と遊び場の関係性

遊びの種類と遊び場についてクロス集計を行った結果が Fig.7 である。「ボール遊び」、「キャッチボール」、「かくれんぼ」をよくすると回答した児童は、遊び場として「公園」を選択する傾向にある。また、「走り回る」、「バドミントン」、「チョークで落書き」をよくすると回答した児童は、遊び場として「道路」を選択する傾向にあることがわかる。

さらに、Fig.5 の分類に基づいてクロス集計を行った結果が Fig.8 である。この図から、「活動型」の遊びを好む児童は「公園」を選ぶ割合が高く、「移動型」の遊びを好む児童は「道路」を選ぶ割合が高いことがわかった。好む遊び方によって好む遊び場も異なるものと考えられる。

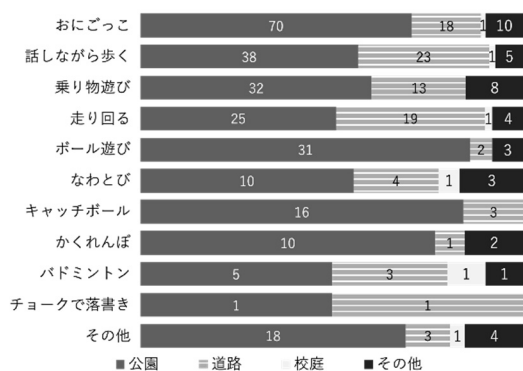


Fig. 7 Types of play and play spots

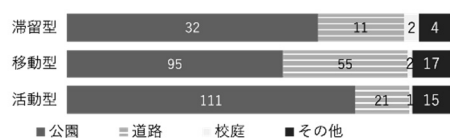


Fig. 8 Category of play and play spots

3-5. 遊びの頻度について

平日の外遊び頻度について調査した結果が Table 4 である。この設問は、選択肢の中から最も当てはまるものを選択するものであり、正門利用者から 91、南門利用者から 109、計 200 の回答が得られた。この図から、正門利用者は「4 日程度」および「5 日程度」遊ぶ子どもの割合が南門に比べて高いことがわかる。一方で、正門・南門ともに 4 割前後の児童が「遊ばない」と回答している。

また、休日の外遊び頻度について調査した結果が Table 5 である。正門利用者から 91、南門利用者か

ら 110, 計 201 の回答が得られた。この図から, 正門利用者のほうが南門利用者に比べて「1 日程度」と答えた割合が高いことがわかる。対して南門利用者は「遊ばない」が半数を超えている。

小学校の北側は公園が 5, 児童遊園が 1 であるのに対し, 南側は公園が 8, 児童遊園が 2 と, 正門側に比べて南門側のほうが遊び場は多い。その一方で, 正門利用者のほうが遊びの頻度が高い。このことから, 遊び場の多さは遊びの頻度に関連しないものと考えられる。

Table 4 Frequency of outdoor play on weekdays

	正門(n=91)	南門(n=109)	計(n=200)
1日程度	17.58%	18.35%	18.00%
2日程度	10.99%	12.84%	12.00%
3日程度	16.48%	18.35%	17.50%
4日程度	6.59%	2.75%	4.50%
5日程度	8.79%	6.42%	7.50%
遊ばない	39.56%	41.28%	40.50%

着色部は他方と比較して優位な項目を示す。

Table 5 Frequency of outdoor play on holidays

	正門(n=91)	南門(n=110)	計(n=201)
1日程度	39.56%	30.91%	34.83%
2日程度	13.19%	14.55%	13.93%
遊ばない	47.25%	54.55%	51.24%

着色部は他方と比較して優位な項目を示す。

3-6. COVID-19 流行による遊び方の変化

COVID-19 流行による遊び方の変化について調査した結果が Fig.9, Fig.10 である。また, Fig.5 の分類に基づいて集計した結果が Fig.11, Fig.12 である。2020 年頃は、「おにごっこ」や「かくれんぼ」など活動型の遊び方が大幅に減少していることがわかる。それに対して, 「乗り物遊び」は正門・南門ともに増加している。「話しながら歩く」については, 南門利用者では大幅に増加しているのに対して, 正門利用者ではあまり変化がない。2021 年頃を見ると, 正門・南門ともに「話しながら歩く」が増加を続けていることがわかる。また, 南門利用者では 2020 年頃の変化がほぼ流行拡大以前の水準まで戻っているのに対し, 正門利用者では「滞留型」が 2019 年

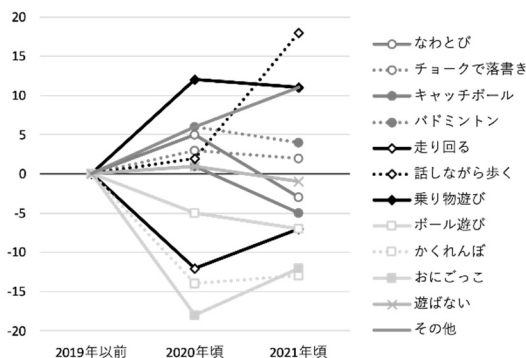


Fig. 9 Changes in category of play (Main gate)

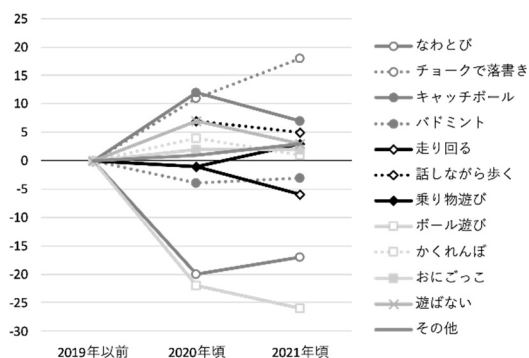


Fig. 10 Changes in category of play (South gate)

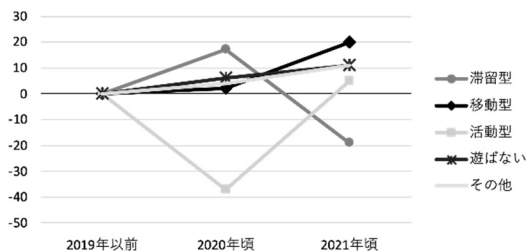


Fig. 11 Changes in play spots (Main gate)

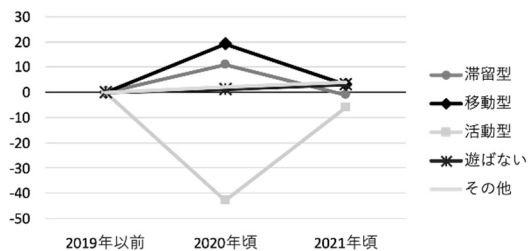


Fig. 12 Changes in play spots (South gate)

以前より減少、「移動型」・「活動型」が増加している。このことから、住宅街に住む児童は COVID-19 流行収束とともに以前の状態へ戻る傾向があるのに対して、都市的地域に住む子どもたちは収束時にも遊び方が変化し続けていることがわかる。

3-7. COVID-19 流行による遊び場の変化

COVID-19 流行による遊び方の変化について調査した結果が Fig.13, Fig.14 である。これらの図から、2020 年頃は、正門利用者で「道路」という回答が増加したのに対して、南門利用者では「家の中」や「遊ばない」など、外遊びに対して消極的な意見が増加していることがわかる。また、南門利用者では「公園」という回答が減少しているのに対し、正門利用者ではほぼ変動がない。

2021 年頃を見ると、正門では「公園」が流行以前よりも増加しているのに対し、南門では 2020 年頃とほぼ同程度であることがわかる。このことから、都市的地域側では道路などを新たな遊び場として活用することによって外遊びを継続していたのに対して、住宅街側では外遊びの機会が減少したものと考えられる。雑司が谷公園の拡張整備が、正門利用者の公園選択増加の一因として考えられる。

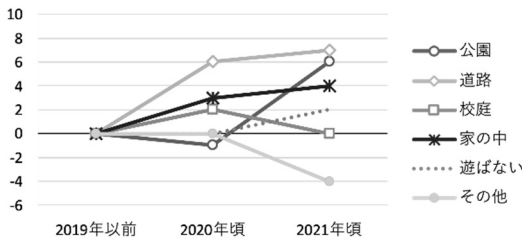


Fig. 13 Change of play spots (Main gate)

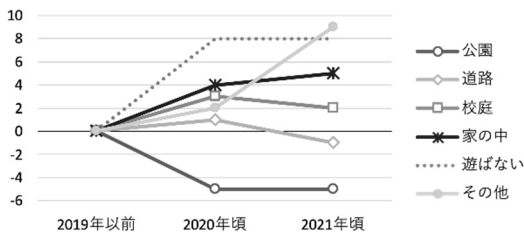


Fig. 14 Change of play spots (South gate)

4. まとめ

同じ地域・学区内においても遊び方や遊び場、遊びの頻度が異なることがわかった。都市的地域と比較して住宅街では滞留型の遊びが多いという結果になった理由として、道路が公園に変わる自由な遊び場として選ばれていることが挙げられる。車や人の通行がある道路では、活発な遊び方よりもその場で楽しむことができるその場遊びが好まれるため、都市的地域に比べて滞留型の遊び方が好まれているものと考えられる。一方で、公園で遊ぶことの多い都市的地域では、家から公園、公園から公園など、遊び場に向かう過程での移動型の遊びが多いものと考えられる。

COVID-19 流行下の 2020 年頃には、おにごっこやかくれんぼなど、人との接触を伴うような活動型の遊び方が少なくなった。その理由として、感染拡大を防ぐために子ども同士の接触が避けられたためだと考えられる。活動型の遊びの中でも、ボール遊びはボールを介した間接的な接触が多く、子ども同士の距離も取りやすいために減少幅が比較的少なかったものと推察される。ボール遊びができる場所が新たに増えたことも周辺に住む子どもたちの遊び方にとって大きな影響を与えたものと考えられる。また、走り回るといった回答に対して話しながら歩くという回答が多い理由として、歩くという行為のほうが心拍の上昇が緩やかであり、マスク着用時にも息苦しくなりにくいということが理由として考えられる。

COVID-19 流行が一時沈静化した 2021 年頃における変化の様相は、都市的地域と住宅街とで大きく異なる結果となった。住宅街は COVID-19 の影響が比較的になかったのに対して、都市的地域では COVID-19 の影響を大きく受けたために、遊び方が大きく変化したものと推察される。

COVID-19 の流行中、流行収束時に関わらず、都市での遊び方は変革を余儀なくされていることが明らかとなった。また、都市化が進むことによって遊び場はさらに公園に限定化されるであろう。自由な遊び場として道路を活用するというのが、諸問題の対策の一手となるのではないだろうか。

謝辞

本研究にご協力頂いた南池袋小学校の教員・児童の方々へ心より感謝申し上げます。

参考文献

- 1) Anna Gromada, Gwyther Rees, Yekaterina Chzhen (2021), 「イノチェンティレポートカード 16 子どもたちに影響する世界先進国の子どもの幸福度を形作るものは何か」, p.21, 32, 公益財団法人日本ユニセフ協会
- 2) 秋田 喜代美, 宮田 まり子, 佐川 早季子, 呂 小耘, 杉本 貴代, 辻谷 真知子, 遠山 裕一郎, 宮本 雄太(2015), 「小学生の遊び観の分析 ―遊びに対するイメージと価値認識に着目して―」, (「東京大学大学院教育学研究科紀要」 第 55 巻 p.325-346, 東京大学大学院教育学研究科)
- 3) 東京都都市整備局：東京都木造住宅密集地域整備事業 実施地区一覧表, <https://www.toshiseibi.metro.tokyo.lg.jp/bosai/mokuzou2.htm> (最終閲覧：2022/10/31)
- 4) 豊島区 HP, <https://www.city.toshima.lg.jp/index.html> (最終閲覧：2022/10/5)

